

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25370140

研究課題名(和文) 中世南都・西大寺及び西大寺流の造像(伝統・密教事相・宋風)についての総合的研究

研究課題名(英文) General Study on Art of Saidaiji-temple and Saidaiji-temple School , Tradition, Esoteric Buddhism and The Influence from China

研究代表者

内田 啓一 (UCHIDA, KEIICHI)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：30327952

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)： 作例の調査を中心とし、そこから得たデータを基本として文献資料の確認を行い、西大寺流に関する密教事相と宋風の影響を見だし、伝統的な図様と変容していった図様について研究を展開させた。また、絵画作例のみならず版画作例にも焦点を当て南都における宋代版画の受容についても研究成果として論文を発表した。

一方、西大寺流の律僧出身で後に小野流の密教僧となり醍醐天皇の護持僧となった文観房弘真については関係した一作例、関係と想定される一作例、後世にモデルとなった一作例を考察し、それぞれ論文とした。

以上、研究課題は論文として発表した。高僧画像や宋版については継続的に研究を進めており今後研究成果とした。

研究成果の概要(英文)： Mainly investigation of works, basing on the data got from it checked the literature, discovered the effects between esoteric buddhism and the influence from China, which are related to Saidaiji school. We developed the research on the traditional picture design and changed picture design. And we focused not only on picture examples but also on print examples, published an article about the acceptance of Song prints in Nara as a result of the research. On the other side, about monk Monkan who used to be esoteric buddhism of Saidaiji School and became esoteric buddhism and monk for Emperor Godaigo, investigated a related work example, an assumed related work example, and a work example which became a model in the coming ages, wrote theses on each item.

The above mentioned items, I published the results of research as theses, am still continuously going on with priest and Song prints. That is the research task from now on.

研究分野：日本美術史

キーワード：宋代版画 請来品 密教事相 西大寺流 信空と文観

1. 研究開始当初の背景

奈良・西大寺及び西大寺流に関しては日本中世史学や仏教史学の方面からは注目すべきテーマとして論考が盛んに発表されている。主として鎌倉時代南都にあって西大寺を復興した叡尊を中心とする論考である。しかし、美術史学では、過去に『佛教藝術』で西大寺特集が組まれるなどしたが、近年ではやや等閑視され、新たな研究展開がみられなかったのが現状であった。そんななかで内藤榮氏が密観宝珠舍利容器を中心として、西大寺の密教に焦点を当て、宝珠の中世的な変容について論じた。申請者も断続的に西大寺関係美術に関する論考を発表し、また、西大寺律僧で後に醍醐小野流の報恩院流や無量寿院流の法脈に連なった文観房弘真の事績に焦点を当て、邪教・立川流の僧と汚名をきせられていた文観が関わった美術作例を中心に清浄なる作善を論じ、その生涯を浮かび上げさせた『文観房弘真と美術』(法蔵館、2006年)を出版した。

その後も文観房弘真関係と思われる美術作例が少しずつだが、見いだされ、また、西大寺においても密教事相に関係する作例や宋代美術の影響が想定される作例が見直されるようになり、南都での伝統を継承しながらも密教事相や宋風の受容によって造像された作例も多いことがわかってきた。

これらをキーワードに西大寺の叡尊を主軸としながらも、戒律と密教、そして宋風を主軸として、様々な視点から考察する必要があると思うようになった。西大寺及び西大寺流の造像について総合的な研究を展開させるべきだと考えたのである。

2. 研究の目的

叡尊によって復興された西大寺であり、戒律を中心とした事績は大いに研究されるべき点である。しかし、真言小野松橋流の法脈に連なることから、密教事相に関係する作例も多い。その法脈は西大寺流と称されていることから窺える。その一方で清涼寺式釈迦像の模刻による造像や南都の祖師画像の制作など伝統遵守の姿勢もある。さらに請来された宋代美術を積極的に摂取している面も認められるのである。

中世西大寺の造像の注目点は、

- A 伝統 祖師画像と釈迦関係
- B 密教事相 別尊曼荼羅・白描画像
- C 宋風 涅槃図・文殊菩薩画像

の3点に集約されることとなる。Aでは南都の伝統である法相の祖師(玄奘三蔵や慈恩大師)の肖像画制作に加え、戒律における祖師(南山律師や道智律師)などが授戒の際に用いられるようになり、中世南都寺院の真言化では空海をはじめ、真言八祖が灌頂儀式で奉懸されるなど、関係する祖師画像の種類が増している。さらに西大寺流のなかでの祖師・叡尊、忍性、信空の肖像画も制作される。また、Bでは入唐八家が請来した

密教の流れに対し、平安時代末期には日本化された密教事相が展開し、さらに南都では宝珠や『瑜祇経』、空海仮託の『御遺告』をベースとした解釈に広がりが見え、それにとともなう造像の変容が認められるのである。宋風については憶測であるが、南都では古来より唐の文化を希求し、需要してきた姿勢があるとの意識が根底にあったようにも思われる。この研究では史料の解読や美術作例の実査を通じて、先に列挙した3点の特色を浮かび上げさせることを目的とする。西大寺の姿勢は中世南都の諸寺院の規範と判じられる造像活動であり、その全体像をも視野に入れて研究を展開させたい。

3. 研究の方法

叡尊に関しては基本資料としては『金剛仏子感身学正記』があり、江戸時代の資料ではあるが『行実年譜』がある(いずれも『西大寺叡尊伝記集成』〔法蔵館〕に収録、発願文や造像銘、像内納入品文書など他の諸資料も豊富にあり西大寺研究の基本書であることは著明)。また西大寺伝来の聖教類については『奈良市・西大寺所蔵典籍文書の調査研究』(研究代表者・稲城信子、元興寺文化財研究所)が極めて有益である。叡尊が撰述した次第書などの聖教が転写されているが、叡尊の弟子で、密教の付法者として宝生護国院長老であった性瑜や河内・西琳寺長老であった惣持等の名もみられる次第書が多くリスト化されており、西大寺流のなかで、いかにして密教が相承され、書物が相伝されていった姿勢と法脈の流れ窺い知ることができる。これらを主軸として文献資料の確認を行う。

作例の実査についてはそれぞれの所蔵者と連絡し、許可を得て調査という通例の手段である。デジタルカメラによる撮影、法量などの計測、描線や施色、文様などを目視によって観察し、様式や作風の記述していくなど美術史学における調査に基本的で忠実な実査とする。また、版画作例についてはデジタル顕微鏡カメラによる撮影を行い、紙質の繊維構造についてもデータ収集と分類化を行い、和紙の楮紙、それに対する中国紙の竹紙との比較検討についても留意していきたい。

4. 研究成果

実査によって多くの作品にあたり、デジタルカメラによって全体及び細部にわたる図版データを収集、ストレージすることができ、成果発表へとつながった。

特に文観房弘真については3本もの論考へとつなげることができたのが大きな成果である。

注目すべきは奈良吉野・吉水神社の両界種子曼荼羅で、後醍醐天皇が建武の新政後に京都を離れ、吉野に朝廷を開いた南朝時代の作例である。種子は後醍醐天皇宸筆の作例と判じられるものであり、文観房弘真が曼荼羅の図様を描いている興味深い種子曼荼羅とな

っている。後醍醐天皇と文観房弘真との関係は護持僧として密なるものがあつたことが従前より指摘されているが、それが美術作例によつても見いだされることとなつた。後醍醐天皇が最晩年に関わつた美術作例としても注目される。早稲田大学図書館所蔵の『文観阿舎利絵巻』と『狐草紙』は後世の作例であるが、室町時代の人々における文観のイメージが絵画化された内容のもので興味深い。ほとんど同じ構成と図様を示す二つの作例であるが、詞書の検討から登場する僧侶を文観房弘真と比定し、栄耀栄華を極めた時期が後醍醐天皇の建武の新政以降の短期間であり、それがあたかも美女狐を中心として狐に誑かされた人生であつたことを揶揄する内容であることを論証した。妙法院蔵神像図巻は従来から巻末に描かれた牛頭天王図が珍しいものとして注目されてきた作例であるが、全体構成と神像の配列意図を論じられたことがなく、図像を中心として説明を試みた。神像諸尊の配置が日本の神代の神々（天神七代と地神五代）中国の神々、印度の神々と三国を相対させている内容であると考え、奥書に記された「小野僧正」の文字に注目して、成立そのものについては各図像の巧みな借用から密教図像に精通した図像僧を想定して文観房弘真制作の可能性を指摘した内容となっている。

また、宋風については宋代版画を通じて日本への請来事情を踏まえ、南都での受容について考察できたのは幸いであつた。デジタル顕微鏡カメラによる紙質の繊維構造の確認によつて竹紙であることが判明し、宋代版画であることを決定づける有力な調査方法であることが研究成果にもつながっている。これは元興寺の如意輪観音図、円成寺の如意輪観音図、そして和歌山・遍照寺蔵木造弘法大師像内納入品の阿弥陀三尊図の解析に有効な手段であつた。元興寺本は宋代版画なのか日本版画なのか本格的に論じられることもなく、如意輪観音の図様を論じる時に断片的に参考とされてきた作例であり、円成寺本に至つてはほとんど言及されることもなく等閑視されてきたものである。この2作例を宋代版画と断定し、元興寺本と円成寺本が同版であることをつきとめ、円成寺本が度重なる摺写によつてやや摩耗した板木から摺写された作例と考えた。この事例は同一版画が複数回にわたり請来されることがあるものとして極めて示唆に富むものであろう。従来、宋代版画としては清涼寺蔵木造釈迦如来像内納入品の弥勒菩薩図・靈山説法図・文殊菩薩図・普賢菩薩図の版画4種が有名であり、摺経見返し図としては『細字法華経』などが知られていたが、これらにつぐ一枚ものの版画作例として今後大いに注目されるべきと思われる。宋代版画の一枚ものの作例は中国にもほとんど残されておらず、大変貴重なものと評価されよう。遍照寺本の阿弥陀三尊図も宋代版画から鎌倉時代に描かれた阿弥陀

三尊画像への図様伝播と影響の点も今後注目される点である。

なお、デジタル顕微鏡カメラによる紙質の調査方法とその成果は、申請者が研究代表者となっている、平成28年度以降の科研費基盤研究(C)「東アジア(宋・高麗・日本)における木版画の技法と表現、図様伝播についての総合研究」(課題番号16K02281)の研究開始の背景のひとつとなつた点も付記しておきたい。

さらに成果として加えれば、遍照寺像の納入品の一種である版画地藏菩薩図は叡尊の高弟で、叡尊没後に西大寺第二世長老となつた信空による開板で、般若寺長老の時代のものであり、若き頃の事績である。上に地藏菩薩像、下に勧進文を配すなど、勧進札の形式をも示している。西大寺流のなかでの地藏菩薩については論じられることもなく、西大寺奥の院に安置される、室町時代の木造地藏菩薩立像に先行する作例であり、その造像、そして信仰の点で注目される。日本の鎌倉時代の版画史の流れのなかでも新たな作例として加えられるべきものだが、申請者もこの開板背景については現在考察しきれていないのが現状である。般若寺信空と距離的にも至近である東大寺戒壇院、そして唐招提寺や法隆寺北室院などとの律僧のネットワークを考慮しながら、地藏菩薩印仏の制作については今後の課題としていきたい、成果としても是非とも結実させたい。

伝統については西大寺本堂本尊の清涼寺式釈迦如来立像について改めて考察することができた。願文を検討することで、清涼寺釈迦に南都の僧がよせる生身の意味を考え、截金による加飾による効果などを再考し、さらに清涼寺式釈迦像を造立した後の規範と影響など多くの問題を見いだすことができた。論じた清涼寺式釈迦画像は西大寺像の忠実なる転写画像であり、この画像が描かれていることは西大寺蔵の釈迦三尊画像(伝仁王会本尊)にも連関していくと思われる。戒律の祖師をはじめ、南都の祖師画像制作については研究成果としての論文発表はないが、特に慈恩大師画像については現在も継続して研究を進めており、いずれ雑誌論文に投稿の予定である。

論文発表がなかつた成果として、新たに見いだされた大きなテーマに、生駒・長福寺の本堂内陣壁の諸問題がある。奈良県教育委員会によつて解体修理が行われた本堂であるが、柱や長押に鎌倉時代の壁画が確認され、申請者が絵画担当として奈良県から要請されたことは幸いであつた。そこでは内容の確認、尊像の名称比定、復元図の作成に従事することができた。保存解析技術専門の研究者より赤外線データや顔料分析のデータを提供され、墨線や絵の具について考え、模写・復元図作成担当者とともに、当初の図様や彩色について検討を加えた。

保存状態があまり良好ではないことや残

存する尊格が少ないことはやや惜しまれるが、注目すべきは内陣の中心柱であり、中心柱の東柱に胎蔵界五仏、西柱に金剛界五仏があらわされている。密教の根幹が描かれているのである。しかも宋風を受容し、そして消化した様式で描かれている点である。南都は保守的である一方で新種の図様摂取、特に宋風に積極的なのである。また、内陣北の東西の柱上部に弥勒菩薩来迎図と判じられる図様が二種類も見いだされる点も特色である。『覚禅鈔』に「南都で制作されていた」と記されるように、鎌倉時代に隆盛した阿弥陀来迎図とは異なり、弥勒来迎図が南都での重要な画題であったことを再確認させてくれるのである。

内陣構成としては外側の柱には金剛索菩薩や金剛香菩薩、迦陵頻伽などが描かれている点もさらに興味深いものとなっている。金剛索菩薩や金剛香菩薩から金剛界三十七尊が本堂内陣全体に配されていたとも想像されるのである。それが単純に金剛界三十七尊なのか、迦陵頻伽の存在から法華経曼荼羅のごときものだったのか依然として解明できていない。また、迦陵頻伽が構成の一尊ではなく、浄土变相図にみられるように清浄なる浄土を祝福する尊として描かれているのであれば、金剛界三十七尊を荘厳する位置付けともなるのである。となると本堂内陣は密厳浄土の様相を呈していたことと想定されるのである。いずれにしても、密教諸尊によって構成されていたのであるが、長福寺本堂の内陣内容とテーマは西大寺流にとっても南都寺院の中世密教化を考える上にも今後の大きな課題である。

長福寺は鎌倉時代に叡尊の弟子であった実詮らによって復興されたと考えられている寺院であり、西大寺末でもある。その本堂内陣が密教空間であった点は本研究に投げかける問題が山積であり、まさしく益するところ大であった。

研究成果は報告書の他、建築担当、保存分析担当、復元担当、そして申請者の絵画担当の分担で仏教美術専門雑誌に特集号を平成28年秋に予定している。また、一般の方々への研究成果発信としては、申請者が編集責任者となり、カラー図版が多く掲載され、平易な解説がつけられた出版物も予定していることも付言しておく。

最後に聖教類に関してであるが、神奈川・総持院に叡尊が撰集した事相書が数多く伝来していることを本研究期間の修了間際になってから見いだした。すでに調査の意向は連絡したが、まだ精査していないので詳細は不明な点多々ある。写本の系譜や西大寺流の東国寺院への伝来の由来など、神奈川・称名寺や忍性が長老であった極楽寺との関連から種々の問題点を必ずや提供できるものと考えている。

以上、基盤研究(C)「中世南都・西大寺及び西大寺流の造像(伝統・密教事相・宋

風)についての総合的研究」(課題番号25370140)研究成果の概略である。新たに見いだして、様々な角度から考究を加えた作例も多い。しかし、調査のなかで改めて確認し、今後も継続して行すべき研究テーマも残されていることが明確になっていった。その点もある意味で成果とってよいだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計11件)

1. 内田啓一

「個人蔵清涼寺式釈迦如来画像について—西大寺像との関わりを中心に」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』第3分冊』61号, p31-47, 2016年3月, 査読無

2. 内田啓一

「妙法院蔵神像図巻の図像学的考察」『美術史研究』第53冊, p89-123, 2015年12月, 査読無

3. 内田啓一

「唐物・韓物・和物のたからもの—木版画を中心に」『美術フォーラム21』(特集 グローバリズムの方法論と日本美術史研究) vol.32, p97-102, 2015年11月, 査読無

4. 内田啓一

「宋代版画三題 元興寺蔵如意輪を中心とした円成寺蔵如意輪・遍照寺蔵阿弥陀三尊」『佛教藝術』342号, p9-32, 2015年9月, 査読有

5. 内田啓一

「MOA 美術館蔵『伝法正宗定祖図』について—宋請来の拓本と図像」『國華』120(10), p7-20, 2015年5月, 査読有

6. 内田啓一

「早稲田大学図書館所蔵『狐草紙』と『文観阿舍利絵巻』 文観房弘真の後世におけるイメージ化」『早稲田大学図書館紀要』62号, p27-66, 2015年3月, 査読無

7. 内田啓一

「灌頂と真言八祖画像」森雅秀編『アジアの灌頂儀礼 その成立と伝播』所収、法蔵館, p.292-309, 2014年10月, 査読無

8. 内田啓一

「吉野・吉水神社蔵両界種子曼荼羅 後醍

翻天皇と文観房弘真」『早稲田大学大学院
文学研究科紀要. 第3分冊』59号、p29-47,
2014年2月,査読無

9. 内田啓一

「『互いの御影』空海と僧形八幡神画像に
ついて 成立から浄光明寺本まで」『佛教
藝術』330号,p29-54,2013年9月,査読有

10. 内田啓一

「『太平記』」岩波講座『日本の思想 第
二巻 場と器』所収, 岩波書店,p.285 -
296,2013年5月,査読無

11. 内田啓一

「西大寺叡尊と密教図像」『てら ゆき め
ぐれ 大橋一章博士古希記念美術史論集』
所収,中央公論美術出版社,p.381 - 392,2013
年4月,査読無

〔学会発表〕(計0件)

特になし

シンポジウム発表はあり。「日本の仏教版
画について」2015年7月、於韓国国立民俗
博物館(ソウル) 古版画博物館(温州) な
おこのシンポジウムは日韓国交五〇周年事
業として開催されたものである。

〔図書〕(計0件)

特になし

〔その他〕

ホームページ等

特になし

6. 研究組織

(1)研究代表者

内田啓一 (UCHIDA, Keiichi)

早稲田大学・文学学院 教授

研究者番号: 30327952

(2)研究分担者

なし ()

研究者番号:

(3)連携研究者

なし ()

研究者番号: